

◆かっぱ民話シリーズ①◆

相模川の河童

さがみがわのかっぱ



作:近藤せいけん

昔々、相模川に河童がすんでいました。相模川にかかる橋にもぐり橋と、地元の人からよばれた橋がありました。相模川が増水すると、橋が川の中に沈み、普段は人々が行き来する生活橋でした。ある日のこと、一人の村人が野良仕事を終え、川向かいの畑から、もぐり橋を渡って帰ってきた。橋の途中までくると、誰かが橋の真ん中に座っていた。村人は声をかけた。

村人 「もしもし、そこで何をしているのじゃ。通るのにじやまじゃ、どいてくれ！」



すると、座っていた者が立ち上がった。背丈は普通の大人なみだが、痩せている。頭に皿のような物を載せ、口はとがって、手は異常に長い。目は細長く、変わった形の身体をしていた。

村人 「お前は、どこの者か？厚木村の者か？見た事もないやつだな。なぜ黙っているのか、早くどいてくれ。」

立ち上がった者は無言で村人を見つめていたが、おもむろに、口を開いた。

河童「おれは、相模の川にすむ 河童。名はないが、つけるとすれば太郎。」

村人 「それじゃ、太郎河童、何の用だ！」

河童 「一人では、寂しいから、話 相手がほしい」

村人 「もう夕暮れが、せまっている、おまえの話し相手をしている時間はない。」

河童 「それじゃ背なかの籠の白いダイコンと、青物を少し置いていけ。このところしばらくダイコンを食べていない、置いていけ！」

村人 「それは出来ない。せっかく大事に育てたダイコンだ、置いてはいけない」

河童 「そうか、それじゃあ鮎と交換しようか。」

村人 「鮎か、鮎と交換ならいい。」

河童 「決まった！鮎一匹と、ダイコン一本でどうじゃ。」

村人 「 それじゃダイコンがかわいそうだ。ダイコン一本と鮎五匹でどうじゃ。」

河童 「それじゃ鮎がかわいそうじゃ。じゃあまけて、鮎二匹とダイコン一本でどうじゃ。」

村人 「ダイコンは重い、鮎は軽い。不公平じゃないか」

河童「何か変じゃが仕方ない。鮎三匹とダイコン一本でどうじゃ、これ以上はだめじゃ！」

村人と河童の取り決めは後の世に残り、今でももぐり橋をわたる人は、ダイコンを持って渡っているという。

(おわり)